

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24593434

研究課題名(和文) 団塊世代男性の退職後の地域デビューと閉じこもり予防を一体的に支援する体制の検討

研究課題名(英文) A study on a system to support baby-boomer generation male retirement social participation and prevention of housebound elderly

研究代表者

米澤 洋美 (YONEZAWA, Hiromi)

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：10415474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：全国シルバー人材センター管理者に会員の健康管理等に関する実態調査を実施した。シルバー保険や入会時の健康自己申告書、労働中の事故、熱中症の予防は多く、反面、健康診断の受診勧奨や健康状態の把握の年度ごとの更新や健康教室等の実施は前者を下回った。また、約3割は会員の自主的な健康づくり活動があった。地方農村部のセンターで会員の自主的な健康づくり活動を計画し決定までの団塊世代を中心としたグループのプロセスを分析した。結果、当初は会議の運営に関わる不安や戸惑いがあり、その後、疑似体験を通し将来起こりうるかもしれない病気や介護への備えの必要性に目を向けるようになり、それを踏まえた計画がすすめられていた。

研究成果の概要(英文)：We surveyed the nationwide Silver Human Resource Center manager about the health management etc. of members. On the other hand, there are many prevention of silver insurance, health self-report at the time of enrollment, occupational accidents, heat stroke, but on the other hand, recommendation for examination of physical examinations, grasp of health condition, update of health condition, etc. were lower than former. About 30% had voluntary health promotion activities by members. We analyzed the process of the group focusing on the baby-boomer generation, planning voluntary health promotion activities of the members at the center of rural areas and deciding the decision. As a result, there was anxiety and confusion concerning the operation of the meeting initially, and then, through a simulated experience, they began to turn to the necessity of preparation for illnesses and care that may occur in the future.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：団塊世代男性 健康づくり 就労 介護予防 シルバー人材センター 自主企画

1. 研究開始当初の背景

介護保険制度導入以降、要支援・要介護認定者のうち、特に軽度者の増加が目立っている。介護予防の重要性に対する高まりを受けて、要介護状態を予防する介護予防事業は、平成18年度より全国の市町村で展開中である。しかし、リスクの高い高齢者を対象とした二次予防対象者事業は、対象者の把握が目標値を大きく下回り、結果的に事業への参加率も著しく低いために、十分な成果を収めていない。いかに早い段階でリスクの高い高齢者を把握し、介護予防事業に繋げるかが喫緊の課題である。介護予防事業の課題の一つとして男性参加者が少ないという問題がある。

先行研究(藤城ら2005)によれば、介護予防事業への男性の参加者は女性と比較して少ないことが報告されている。今後更に高齢化するわが国においては、男性に着目した高齢者の介護予防対策が急務といえる。特にこれから65歳を迎える団塊世代は、およそ664万人で彼らを含む60~64歳の人口は、他の年齢階級よりも多く突出している。

2007年問題として話題に上った団塊世代の大量退職の問題は、就労期間の延長により、2012年問題へと先送りとなった。2012年は団塊世代が65歳を迎え始める時期であり、今後少子高齢化が加速することが予測される。社会保障国民会議による推計では、2007年度から団塊世代が後期高齢者となる2025年までに医療・介護費用に関する公費負担は、GDPで1.8%増加する。退職後の行動は地域デビューとの言葉に代表されるように、これまでの会社人間から、地域でのボランティア活動等に勤しむ集団がいる一方で、会社や大学・高校の同窓会などの集まりには参加するものの、これまで地域との繋がりもなく過ごし、退職を迎えても地域に根ざした生活を考えようとはしない集団についても問題視されてきている。

地域社会における高齢者相互の助け合いの担い手は女性が中心であることが知られている。女性の場合は、子育てや近所つきあいを通して培ってきた人間関係のネットワークを持ち、地域の一員として活動してきた割合が男性よりも高い。その一方で、男性は、サラリーマン生活の中で組織の一員として過ごしてきた時間が長いだけに、退職後に地域のネットワークに溶け込みにくく、職住隣接でなければ、当時の同僚とも縁遠くなり、孤立・閉じこもりの危険性が高い。男性が地域に関心を持つテーマとして、歴史、コンピュータ、写真、男性専門、機械、財テク、ジャズ等のキーワードは従来提案されているが、それらのキーワードを呼び水に人を集めたとしても、その後の地域活動の参加に結びつかない事が取り沙汰されている。

退職直前の団塊世代男性を対象にした質的調査でも、退職後の暮らしや健康管理に対して、具体的イメージ化に乏しい、できる限り仕事とともにある暮らしを望み、余暇は地

域にとどまらないなどの特徴が出され、介護保険制度が現在提供している介護予防メニューとはかけ離れていることが明らかになった(米澤2011)。

高齢者の雇用対策には、ヨーロッパ諸国の取り組みがわが国に先駆けて進んでいる。WHOが提唱する、高齢期に心身の健康を維持するヘルシー・エイジングの延長上にあるアクティブ・エイジングの概念が浸透している。これは雇用やより広い社会的活動においても活動的であることを目標として心身の健康に社会的活力を結びつけ、QOLの維持や心身両面での健康の増進を加えたものである(柳澤2004)。中でも英国においては、ブレア政権以降ニューデール50プラス政策が2000年から全国展開されている。パーソナルアドバイザーによる生活相談・就業支援ができるプログラムの評価は高い(日本労働研究機構2002)。高齢者自身が健康づくりや介護予防に取り組むことにより、介護が必要となる期間をできるだけ短くし、地域社会に積極的に参加することは、より自分らしく生きがいのある充実した人生を送ることにつながる。

社会参加、社会貢献、就労、生きがい、健康づくりなどの活動は、介護予防につながるものである。介護予防を広い概念として捉え、特に男性にとってなじみやすい就労に着目することで、地域活動への参加を促し、閉じこもりを予防することに繋がるものと考えた。全国1332の市町村にあるシルバー人材センター(以下、SCと略記)は、年間の入会者がおよそ15万人に対して、退会者も10万人もいる。退会理由の上位は、健康問題が23.0%、ついで希望の職種がないが15.0%となっている。これらの退会者を含めた継続的支援ができれば、地域参加と介護予防を一体的に促進する体制が整うものと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの介護予防事業の対象者の把握体制を踏襲せず、就労の延長上でありながら自治体単位で事業展開しているSCを拠点に、地域デビューや健康づくりを推進するコーディネーターを養成し、地域活動への積極的参加から閉じこもりのリスクの高い高齢者の把握や介護予防事業紹介までをスムーズに支援する新しい体制づくりの検討を行う。

3. 研究の方法

(1) 県におけるSC会員の健康管理・健康づくりに関する実態調査

目的は、SCで現在行われている健康管理に関する機能の実態を把握し、今後SCで働く高齢者の健康管理や健康づくりのために求められる機能や人材を明らかにすることである。

調査方法：面接による聞き取り調査

データの収集方法

時期：2014年8月~9月

対象：県下全てのSC(15箇所)の管理者も

しくは副管理者 15 名とした。

調査項目： S C とその会員の概要、 主な入退会の理由、 健康管理としておこなっていること等である。

倫理的配慮： 県下全ての S C に対し研究代表者が電話で研究目的等を説明し S C に赴き、 S C 管理者もしくは副管理者に対し、説明書を用いて研究目的、研究方法、研究参加の自由、匿名性の保持、結果の公表等を文書と口頭で説明し研究協力を依頼、協力の得られた人を対象者とし文書で同意を得て実施した。また、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

(2) S C 会員の健康づくり自主企画事業実施後の実行委員の思いに関する質的調査

目的は、地方農村部の S C (Z S C と表記する) で行われている会員全員を対象とした健康づくり自主企画事業 (以下、交流会と略記する) の実行委員経験後の思いを質的に明らかにし交流会実施によるメリットを提示する。よって、交流会実施に求められる地域保健専門職の支援のあり方を考える基礎資料とすることである。

調査方法：フォーカスグループインタビューによる聞き取り調査

時期：2015 年 3 月

対象：X 県 Z S C の交流会実行委員 10 人とした。

調査項目：インタビューガイドを用い半構造化質問によるグループインタビューを実施した。調査項目は、実行委員になって感じたこと、意識していたこと。時系列に関係なく自由に語ってもらった。許可を得て IC レコーダに録音し逐語録に起こし類似性に従いカテゴリー化し、その内容を表すカテゴリーの名称をつけた。はじめにサブカテゴリーとして抽出し、その内容を検討しカテゴリーとしての名称をつけて抽象化した。各カテゴリーが内容を的確に示すようにこの作業を繰り返し行った。また分析には地域看護学の専門家 1 名のスーパービジョンを受けながら実施し信頼性・妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮：研究者が Z S C 管理者と交流会実行委員に対し、説明書を用いて研究目的、研究方法、研究参加の自由、匿名性の保持、結果の公表等を文書と口頭で説明し研究協力を依頼、協力の得られた会員を対象者とし文書で同意を得て実施した。また、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

(3) 全国 S C 会員の健康管理・健康づくりに関する実態調査および自主企画健康づくりヒアリング調査

今後 S C を拠点とした会員向け健康管理自主企画モデル事業実施に向けた基礎資料とすることを目的とした。

全国の S C 管理者 (副管理者も含む) を対象として郵送法による自記式質問紙調査を实

施し、会員の健康管理に関する実態および人口規模等の関連性を把握する (一次調査) 。その後、同意を得て、会員自身により企画されている健康管理事業の詳細についてインタビュー調査 (二次調査) を実施した。二次調査はインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。

調査時期：(一次調査) 2015 年 11 月

(二次調査) 2015 年 12 月 ~ 2016 年 1 月

調査項目 (一次調査) : S C とその会員の概要、 健康管理・健康づくりとしておこなっていること 会員全員を対象とした会員の自主的健康に関する事業実施の有無等である。

(二次調査) : 会員向け交流会実施のきっかけ 会員向け交流会実施にあたり重要視したことである。

(4) 地方農村部 S C 会員による健康づくり計画策定時の合意形成に至るプロセス ~ 策定会議の質的分析 ~

地方農村部の団塊世代を中心とした S C 会員が会員全体の健康づくり活動について企画する会議 (以下、会議と略記する) において、健康づくり活動の計画策定に至るまでの合意形成のプロセスを質的に分析し、S C で健康づくり活動が採用され、継続するために計画策定時点で必要な概念を抽出することを目的とした。S C 会員の自主企画による健康づくり事業を先進的に実施してきた S C において、会員自らが S C の健康づくり活動を計画し、合意に至るプロセスを 6 回の会議録から質的に分析した。

調査時期：2016 年 2 ~ 3 月

調査方法：同意が得られた研究参加者 12 人および S C 事務局、地域包括支援センター保健師、社会保険労務士らと会議を計 6 回開催した。全ての会議の内容「次年度のシルバー人材センター会員の健康管理活動について」を IC レコーダにて録音し、逐語録に起こして言語データを質的帰納的に分析した。1 回の会議を概ね 2 時間程度とした。また分析には地域看護学の専門家 2 名のスーパービジョンを受けながら実施し信頼性・妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮：(一次調査) 全国の S C 管理者に対し、調査協力依頼書に研究目的、方法、研究参加の自由、匿名性の保持、結果の公表等を記載し、協力を仰いだ。調査票の返送をもって同意を得たと判断する旨を明記した。

(二次調査) 研究者が S C 管理者と研究対象者に対し、説明書を用いて研究目的、研究方法、研究参加の自由、匿名性の保持、結果の公表等を文書と口頭で説明し研究協力を依頼、協力の得られた会員を対象者とし文書で同意を得て実施した。また、福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4 . 研究成果

(1) 県における S C 会員の健康管理・健康づくりに関する実態調査

研究対象者のうち、同意の得られた 14 人を調査対象とした（有効回答率 93.3%）。SC とその会員の概要は表 1 の通りで組織の母体となる自治体の高齢化率の平均は 36.6 ± 3.3% で全国平均を上回っていた。また会員の男女比はおよそ 6:4 で男性の会員が女性を上回っていた。

入退会の動機や理由は表 2 に示す通りで、入会は社会参加と健康増進が最も多く、退会は自身の病気が一番多く次いで加齢であっ

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
母体自治体人口	10154	266836	52423	67441.5
うち60歳以上人口	3921	88614	18028	22027.1
高齢化率(%)	31.3	41.9	36.6	3.3
粗入会率(%)	2.3	6.5	4.2	1.3
会員数全体(人)	240	2277	607	553.6
男性(人)	134	1301	350	325.4
女性(人)	99	976	257	231.9
会員の年齢(歳)	70.4	73.2	71.4	0.8
男性(歳)	70.7	73.8	71.7	0.9
女性(歳)	69.7	73.4	70.9	1.0

た。健康管理として行っていることは草刈や剪定等の作業面に直結する安全管理に対する健康管理的側面は全てのSCで徹底されている反面、健康診断の受診の有無の把握や通院服薬状況の把握の年次更新等は実施しているSCが少数であった。

	回答数	%	
入会の動機(上位3位まで)			N = 40
社会参加	11	27.5	
健康増進	10	25.0	
時間的余裕	7	17.5	
経済上	6	15.0	
仲間づくり	3	7.5	
その他	3	7.5	
退会の理由(上位3位まで)			N = 37
病気	11	29.7	
加齢	6	16.2	
家の都合	6	16.2	
他に就職	4	10.8	
その他	10	27.1	

(2) 交流会実施後の実行委員の思いに関する質的調査

対象となる健康自主企画事業は、2010年から開催し5回目であった。開催月は例年2月で積雪によりSCの活動も少なく、外出の機会の少ない時期を選定していた。開催頻度は年1回であった。実行委員制で市町村合併前の旧3町村から均等になるように事務局で実行委員を選出し、前回開催時に実行委員を経験した者と今年新たに実行委員になった者が混在していた。実行委員は開催前に企画会議を実施し会員の発案で健康づくりにつながるプログラムを計画し運営実施していた。事前の準備として顔合わせと企画を兼ねて約3時間程度の企画委員会を開催し、前日

に会場準備や当日の昼食の下ごしらえの目的で集まり当日も調理準備や受付準備のために開催時刻より1時間早く集合していた。主な内容は、体操、ゲーム、ダンス、食事会等である。例年参加者は100名程度だが今回の参加者は大雪の影響もあり60人であった。当日仕事があって参加できない会員がいた。会場までの主な交通手段は自家用車で、近くの会員が誘い合って車を乗り合わせて会場まで来る参加者が多かった。

対象者の概要：実行委員10人全員から協力が得られた。性別は男性4人女性6人であった。平均年齢は67.1歳。日ごろは剪定や清掃、調理等の活動をしていた。なおインタビュー時間は80分であった。

実行委員を経験した思い

内容分析の結果、3つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーが抽出された。以下カテゴリーを【】サブカテゴリーを「」代表的な発言例を『』にて記した。

カテゴリーは【自身の中に芽生えた交流事業に参加することの楽しさ】【自分以外の参加者とSC全体への思いやり】【交流会を通して描くSCのあり方への期待】の3つが抽出された。サブカテゴリーは「(外出する機会が日頃無いから)外出の良い機会になった」「これまでの交流会のイメージが変わった」「また参加してみたい」「みんなが楽しく食事して欲しい」「プログラム固定化への恐れ」「未参加者の配慮」「SCのこれまでのイメージを変えたい」であった。

3つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーの関係を図1に示した。

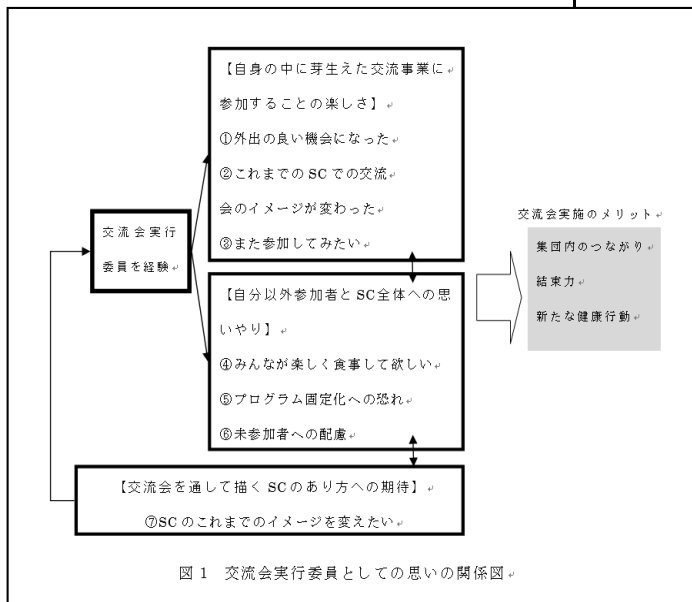
交流会の実行委員を経験することによって、個人の体験による意識の変化と、今回の交流会以外の事業に関しても個人として関心を持つなどの変化がみられた。また、個人だけの思いにとどまらず、そのほかの参加者や当日参加していない会員に対しての思いやりやプログラム内容の振り返りがみられた。

(3) 全国SC会員の健康管理・健康づくりに関する実態調査および自主企画健康づくりヒアリング調査

一次調査：

全国SC(1304)の管理者のうち、820人の回答(回収率62.9%)を得、重複回答を除く818人を分析対象とした。

SCとその会員の概要：回答者の基本属性：性別は男性695人(85.0%)女性121人(14.8%)であった。平均年齢は59.3±9.0歳。現在の役職は事務局役員402人が最も多かった。SCの概要：会員数は最小15人、最大11893人。母体自治体人口は1万人以上2万人未満が115人(14.1%)と最も多かった。



会員の健康管理・健康づくり活動実施の有無：全SCが実施していた。内容はシルバー保険の加入 792 人 (96.8%)、入会時健康チェック (自己申告) 716 人 (87.5%)、労働中の病気の予防 697 人 (85.2%)、労働中の怪我予防 680 人 (83.1%) の順が多かった。また、

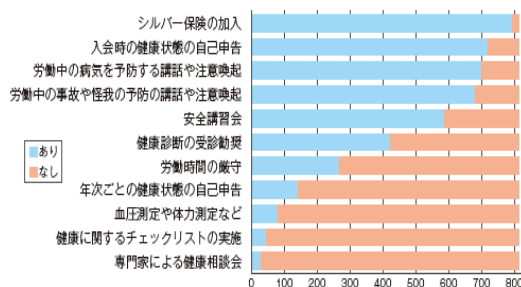


図2 健康管理・健康づくり活動実施の有無

健康診断の受診勧奨 419 人 (51.2%) であった。会員の健康管理・健康づくりは、労働中の病気や怪我の予防や保険が 8 割以上で実施されていた一方で、高齢者の集団としての健康管理・健康づくりの側面は前述を下回っていた。

会員全員を対象とした会員の自主的健康づくり活動実施の有無：

会員による自主的健康づくり活動を実施しているのは、264 人 (32.3%)、なし 518 人 (63.3%) で約 3 割が自主的健康づくり活動を実施していた。その内容 (複数回答) は以下、13 のカテゴリーに大別された (表 3)。

二次調査：

一次調査で会員による自主的健康づくり活動を実施していると回答のあった 264 人のうち、二次調査に同意のあった 62 SC から趣味の会等親睦・交流以外の目的があると判断した 5 SC の事務局長ならびに事務局員 7 人

にインタビュー調査をおこなった。

平均インタビュー時間は 60 分であった。母体自治体の人口は最小 30,000 ~ 最大 430,000 人で運営形態は 3 SC が単独、2 SC は広域連合であった。会員数は最小 200 ~ 最大 2900 人であった。

活動内容は、劇団による福祉施設への慰問、手工芸・飲食店の運営販売、女性部会による転倒骨折予防教室の運営、野菜直営所の運営・販売、安全管理委員会運営・交流祭り開催の企画運営であった。

インタビューの内容分析の結果、会員の自主企画による健康づくり活動で重視している事柄から醸成される機能として、4 つのカテゴリーが抽出された。【分かち合う】【はぐくむ】【創造する】【万一に備える】であった。

【分かち合う】【はぐくむ】【創造する】【万一に備える】であった。

表3 会員の自主企画による健康づくり活動

1	互助会・親睦会・同好会による活動 (運動・旅行・趣味)
2	会員交流会 (新年会・花見・慰労会)
3	スポーツイベント (歩こう会、ランドゴルフ)
4	レクリエーション大会
5	ボランティア活動 (公園の草刈、振り込め詐欺防止キャンペーン)
6	農園を活用した園芸
7	世代間交流
8	介護予防事業
9	サロン事業
10	販売事業
11	女性部会による介護予防事業 (一般参加可)
12	講演会
13	安全委員会による広報活動

(4) 地方農村部 SC 会員による健康づくり計画策定時の合意形成に至るプロセス～策定会議の質的分析～

研究対象者 12 人の性別は、男性 5 人、女性 7 人。平均年齢 67.4 ± 2.5 歳、SC 加入年数は 5.4 ± 2.5 年であった。全員が家族と同居、半数が定期的に通院していた。会員自らが SC の健康づくり活動を計画し、合意に至るプロセスを 6 回の議事録から内容分析を行った結果、28 のサブカテゴリーから 6 カテゴリーが抽出された。【会議の運営に関わる不安や焦り】として「メンバーへ選ばれたことへの戸惑い」や「会員の思いの把握につながるという期待」が初回に表出され、その後終盤の 4 - 6 回目に「グループの課題は一度やってみないと決めかねるという葛藤」「繁忙期に入るとゆっくりしてられないというあせり」があり、「今後の見通しが見えて落ち着く」等の会の運営の成り行きについて気に掛けるものであった。また、【働くことの楽しさを実感】として「シルバーという環境で働くことの楽しさ」や「仕事とストレスはピンとこない環境」のように SC で働く上での

楽しさや仕事 = ストレスのような構図がSCでは起きてないことを実感する機会が1-2回目にみられた。1-3回では【SCへの思いと期待

】として「シルバーの仕事だからこそストレスがない」「仕事を選べる環境の反面人材配置に偏りが出る」「シルバー保険へ限界となんとかならないのかという物足りなさ」のように今のSCという組織の存在について振り返りその特徴や希望を表出していた。【高齢者としての自分を顧みる】として「自分で思っているより危険な自動車運転」「作業中ひやっとした経験」「定年のないSCの自分で決める引き際の不安」のように日頃の就業上の危険や不安について2-6回の中で表出し、一方で【病気や介護にはまだ大丈夫という安堵感】が「認知症でなくて物忘れかという安堵」「危機感がトーンダウンした自動車運転技術への心配」「自分の未来を現実的に描くのは苦手」のように現段階では自分自身が認知症や危険運転に該当しないことを確認すると急速にまだ大丈夫と安心し、5年後10年後に備えようとする機運が軽減する場面があり、それが健康づくり活動の計画の決定を困難にしていた。【計画策定を進める体験】まだ大丈夫と加齢にともない発生する健康課題に対して「シナプソロジーをみんなで体験する楽しさ」では楽しい気分だけであったが、「将来の自分への疑似体験に対する関心」では起こりうるかもしれない未来に対して向き合う姿勢が認められた。自身を含めた会員の健康課題を絞り込み、取り組みを決定していくプロセスにおいて現時点での疾病につながるリスクを見出すのはSCで活動する高齢者にとってはその域に達していないため困難であった。一方、将来に起こるかもしれない疾病やその障害による不便や困難を疑似体験を通じて想像することは取り組みに現実味を持たせ健康づくり活動の取り組み決定を促進していた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

米澤 洋美、健康づくり自主企画事業実施後の実行委員の思いに関する質的研究、第46回日本看護学科論文集ヘルスプロモーション、査読有り、P124-127、2016年6月17日

〔学会発表〕(計 6 件)

米澤 洋美、石垣 和子、全国のシルバー人材センター会員の健康管理に関する実態調査、第5回日本公衆衛生看護学会、2017年1月22日、仙台国際センター(宮城県・仙台市)

米澤 洋美、社会資本としてのシルバー人材センターの活動実態、第46回日本看護学会在宅看護学術集会、2015年10月3日、名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)

米澤 洋美、シルバー人材センターにおける会員への健康管理に関する実態調査、第46回日本看護学会看護管理学術集会、2015年9月9日、福岡国際会議場/福岡サンパレス(福岡県・福岡市)

米澤 洋美、健康づくり自主企画事業実施後の実行委員の思いに関する質的研究、第46回日本看護学会ヘルスプロモーション学術集会、2015年11月6日、富山県民会館(富山県・富山市)

Hiromi YONEZAWA, Awareness of community involvement of male baby boomers living in the local cities of Japan immediately after their retirement 2, 208675/557-1, 46th APACPH Conference th17-19, 0cT, 2014 Kuala Lumpur (Malaysia).

米澤 洋美、地方都市に住む定年退職直後の団塊世代男性にとっての地域での社会参加に対する思い、第43回日本看護学会地域看護学術集会、2012年9月6日、長良川国際会議場(岐阜県・岐阜市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米澤 洋美 (YONEZAWA, Hiromi)

福井大学・学術研究院医学系部門看護領域地域看護学分野 地域看護学・准教授
研究者番号: 10415474

(2) 研究分担者

長谷川 美香 (HASEGAWA, Mika)

福井大学・学術研究院医学系部門看護学領域地域看護学分野 地域看護学・教授
研究者番号: 90266669

北出 順子 (KITADE, Jyunko)

福井大学・学術研究院医学系部門看護学領域地域看護学分野 地域看護学・講師
研究者番号: 80509282